



十戒実践講座

序



主は火の中から、あなたがたに語られた。……

主はご自分の契約をあなたがたに告げて、それを行なうように命じられた。十のことばである。主はそれを二枚の石の板に書きしるされた。

旧約聖書 申命記4:12-13



イエスは彼に言われた。「……もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

新約聖書 マタイ 19:17-19



そしてわれは、かれのために一切の事物に関する訓戒と、凡のことの解釈とを、碑の上に記して（言った）。「これをしっかり守れ。またあなたの人びとに、その中の最も優れた（道）を守るよう命じなさい。われは主の掟に背く者の住まいを、やがてあなたがたに示すであろう。」

クルアーン 7:145 2:38



正語とは、妄語を離れ、綺語を離れ、両舌を離れ、悪口を離れることである。

正業とは、殺生を離れ、不与取を離れ、愛欲を離れ、愛欲における邪行より離れることをいう。

八正道



十戒の内には、あらゆる宗教の教えが集約されており、これによって、神が人間と結ばれ、人間が神と結ばれます。そのため、これ以上神聖なものはありません。

真のキリスト教 283

神のおきてへの道

貴き生まれの者よ、今、汝が道を求める時がやってきた。－チベット死者の書

道は一つか、それとも

人はとかく、自分が選んだ道が「正しいただ一つの道」あるいは、「唯一真の宗教」であると信じます。自分の選んだ特定の宗教、あるいは靈的な道が、自分にとっては正しい道であると言ったほうがより正確かもしれません。自分の選んだ道に他人を引き込もうと思うほど、強く思うようになってくれば、それは自分の〈いのち〉の中で自分の宗教が働きだしたからでしょう。音楽にもいろいろな形があるように、自分の好みに合ったものがあるかもしれません；教育にもたくさんのアプローチがあって、そこから自分のあったスタイルを選びます。これが何故このように多くの宗教があり、そのそれぞれの外形や、伝統や、聖典に特色があるにもかかわらず、すべては同じ方向に導こうとしているかということでしょう。

そのとき宗教は、音楽と同じように、異なる文化背景や様々な意識の状態に適合してゆきます。「ただ一つの正しい歌」あるいは「ただ一つの正しい花」がないように、「ただ一つの正しい宗教」はありません。神に導いてゆくどの宗教も、「正」しいといえます。なぜなら究極的には、一身勝手さから離れ、神の存在へ導いてくれる道を教えてくれること－これが宗教生活の生命であるからです。

神の存在への道、そしてユダヤキリスト今日の約束の地、仏教の極楽浄土といいますが、つまるところ同じことを語っています。道は変わろうとも、目的地はいつも同じです－というのは、真の目的は、世の時と空間の内にはないからです。それが、「神の王国」です。イエスが言われたように、「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」（ルカ 17:21,22）

しかし、神の王国は私たちのただ中にあるとはいふものの、時として自分のうちにこれを見つけることは難しいものです。そこで、私たちはある特定の宗教を求め、信頼できるガイドを得ます。まるで、旅行の準備をするため、旅行会社に行って、助けと案内を請うようなものです。加えて、牧師やラビ、グル、シャーマン、イマームといった個人の案内役は、最も役に立ちます。なぜなら、彼らはそこに行ったことがあり、危険な場所を整え、道にある隠れた危険を教えてくれるからです。また、旅を続けるための食物や、新鮮な水のある泉がどこに見つけることができるかを教えてくれます。さらに、どこで休みを取ればいいのか、その場所を教えてくれます。個人の案内役は、励まし、地図を説明し、私たちが地図を読み誤り、忘れ、迷ったとき、優しく指摘してくれます。

世界の宗教の多くは、道に従う者に、広く色彩豊かな地図を用意してくれています。この書では、様々な宗教の聖典が、本当は同じ一つの地図でしかないかを説明しようとして試みるつもりです。なぜならそれらは皆、基本的に同じメッセージを伝えているからです。すなわち、「一人の神がいて、愛と知恵を無限にお持ちになっていて、私たちが進んで受け入れようとするならば、あらゆる瞬間に、愛と知恵のすべての内に導こうとされている。」ダライ・ラマが言っているように、「世界のすべての大宗教には、愛について同じ考えを持ち、靈的な訓練によって役立つ人格を得ると同じ目的を持ち、より良い人間にしようという同じ効果があります」。（*1）要約すれば、大宗教のすべては、信奉者に神の王国への道を見いださせる助けを探しているのです。

*1 ジェフリー・モーセ、一つ：すべての宗教が持つ基本原則（ニューヨーク：Fawcett Columbine,1989）、フロントカバー

山頂への地図

神の王国に入ることは、しばしば登山にたとえられます。神の王国は私たちの内にあることは知っていながらも、神が山頂で待っておられるという比喩は役に立ちます。山の様々な方向から登っている私たちそれぞれを、慈悲深いまなざしを落とす優しい親のように、神をイメージすることができます。山頂で待ちながら、様々な道を通ってくる者を見守り、様々なガイドや地図を使い、様々な言語を使いながら、神はいかに様々に見えても実は一

つである、山への道すべてをわかっていらっしやいます。なぜなら神は、どんな地図を用いようと、どんなに永い旅であろうと、いつもそこで腕を広げ、私たちを迎え入れようとされているからです。

この本の著者として、十戒という由緒ある道德規範を、山頂に至る地図として用います。これはシンプル、実用的、そして普遍的なものだと思います。十戒は決して神秘的なものではありません。それは容易に誰にでも理解できるもの—どんな文化でも、男でも女でも、若人でも老人でも、貧しくても富んでいようとも—だからです。事実、十戒は人類がもっとも頼りにできる地図であると思われます。なぜなら、この戒の本質は、すべての真の宗教の基盤であるからです。旧約聖書では、出エジプト記 20:1-17 と、申命記 5:6-21 に出ています。この二つにはわずかな言葉遣いの差があるものの、順番や本質的なメッセージは同じもので、神の序言から始まります：

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。

この序言に続き、十戒は次のように与えられます。

あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。

あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。

それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。

しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。——

それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。

殺してはならない。

姦淫してはならない。

盗んではならない。

あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

天界のカリキュラム

十戒は、世界の偉大な宗教すべての内に、形を変えて現れます。最初の戒は二つに分けられる場合もあります（最初は他の神の礼拝を禁じ、次には偶像の礼拝を禁じます）。また第九戒と第十戒は一つにされる場合もあります（貪りを禁じます）。この本では、ユダヤ教やカトリック・プロテスタント（ルター派）で行われている伝統になりませんが、その番号付けを統一するよりも、戒を守ることが圧倒的に重要なものであると認めます。新約・旧約の聖書で、十戒はその番号について言及していません。聖典の言語は「第三日」とか「四番目の天使」、「第七年」と使ってはいますが、「第三戒」、「第四戒」「第五戒」とは言っていません。そのため、「第三戒」、「第七戒」という代わりに、「安息日の戒」「盗むなかれの戒」などになりたいと思います。

十戒は、簡略ではありますが、神が与えられた枠組みであり、その中には霊的真理がすべて含まれると信じています。さらにいえば、神的な連続性をもっているため、単なる倫理条項の寄せあつめでもありません。これは、事実、「神の指で書かれた」天界のカリキュラムであり、人間の霊的成長が意図されたものであると考えています。決して十戒だけが唯一の道であるとは言いつもりはありませんが、最初から最後まで—最初の言葉から最後の言葉まで—十戒は神の真理の連続した流れであり、偉大なる教師—天地にいます唯一の真の神によって備えられたものであると信じています。

エジプトより約束の地へ

旧約聖書の話によれば、十戒はヘブル人の歴史の重要な時期に与えられたものです。ヘブライ民族はエジプトで430年もの間、滞在していました（出エジプト記 13:40）その間の大部分を奴隷として使われ、過酷で、理不尽、そしていつも無慈悲な奴隷監督のもとにいました。そしてついに神は、モーセをヘブル民族から引き起こし、その厳しい囚われから救おうとされました。モーセは彼らをエジプトから約束の地へと導きます。その途中、シナイ山でモーセは十戒を受けます。

その場面は、劇的なものでした。全山が激しく震えたといえます。雷といわずと、角笛の音があり、宇宙の神が山の上の火の中に降りてこられるにつれ、次第に大きくなってきます。神は、十戒の前に、自分は救いの神であると述べられました。—エジプトの囚われからイスラエルの子孫を救った神であると。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」とあるとおりです。

しかし、どのような囚われがここで言われているのでしょうか。そして「エジプトの地」の囚われとは何を意味するのでしょうか？この質問に答えるため、旧約聖書の時代においては、エジプトの地は古代の知識が蓄積され貯蔵されているまさに中心であるとされていました。そこで、エジプトの地は「知識の倉庫」—世界の知性と学究の都と呼ばれていました。学ぶために広く遠くから人がやってきて、知識の渇きを癒していたのです。そういう理由で「エジプトの地」とは「蓄積された記憶」を表象するようになっていました。—すなわち学び、人の心の中に蓄積された知識です。しかし、私たちの人生において、皆その「エジプトの地」を去らねばならず、約束の地—有益な役立ちという純粋な地—へ旅立つ時が必ずきます。聖書にあるとおり、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」（ホセア 11:1, マタイ 2:15）

同じ表象が今日にも適用されます。人がもし知識を得るための状態に留まるなら—神や人に仕えるためそれを用いることなく—エジプトの「奴隷」となります。これは様々な方法で起こりえます。例えば、知識をより多く得て、蓄積するにつれ、人は自分の知性を誇り、他人よりも優れているように感じます。学ぶこと自体に夢中になるあまり、知識の目的が有益な役立ちの人生を送るためにあることを忘れてしまいます。自己愛と欺瞞が自己中心性のうちに完璧に育ってゆくにつれ、その蓄積した知識が何であって自分の目的あるいは自分の身勝手な目的のために使うようそそのかれます。—議論に打ち勝ち、他人を操作し、悪いことを正当化したり、私的な願望を実現するなどです。他方、自分の人生にあえて使おうとしない膨大な知識の山に対峙して、不安になったり恐ろしくなることもあります。学ぶべきことがあまりに多くあることで、永遠の学生として留まることを選び、絶えず知識を蓄え続け、議論しますが、自分を改善したり他人に仕えたりするためにこれを用いることは決してありません。これが、どうにかして、「エジプトの地」で奴隷となり始めたことであり、「囚われの家」を離れないことです。

他方、「約束の地」は、私たちのより高い可能性、神が人類とそのすべての創造物に対して抱く深い愛を感じる高揚した意識をあらわします。それは、ただ「自分自身を向上」させる方法だけではなく、人類のためになし得る限り、役立つというより大切な意味で霊的に成長する、そんな形で自分の学習の成果が見られる心の状態です。私たちは他人への役立ちのために生まれています：人類の霊的再生と成長という壮大なドラマの中で、役立ち、それぞれの役目を果たすために生まれています。神秘思想や偉大な宗教のすべては、天界の王国とは、役立ちの王国であると宣言しています—それは私たちが備えをしているだけではなく、今この時でも参加しているという、美しい王国です。ヘレン・ケラーもこう言っています。「人は天界のために準備するため生まれると古い思想は語りますが、少し見方を変えても、そこには真実を見いだします。天界の知識を得るのは、地上においてより適応してゆくためです。美の映像は、ナザレの工房にやってきたはずで」。マザー・テレサもこう語ります。「愛の果実は奉仕です」。

だれもが、エジプトから約束の地への旅に招かれ、「十戒」と呼ばれる素晴らしい地図を与えられています。誰もがこの招きを受け、地図を用いているというわけではありません。招きを受け、地図を使用しはじめるが、恐怖のほうが強いといったケースもあります。その例が、イスラエルの子孫の話です。聖書の説明によれば、十戒を授かった後、彼らはさらに十四ヶ月の間、シナイ山のふもとを動きませんでした。(民数記10:11) それは彼らがシナイ山に来て、第二年目の第二月のことでした。主は、約束の地への旅を始める時が来たとの合図を送られます。約束の地の国境、カデシュ・バルネアに到着したのは、わずか十一日後のことでした。そのとき、神はモーセに十二人(各族から一人)を選び、国境を越えて、「その地を探れ」と語られます。偵察たちは、その地に四十日と四十夜とどまり、戻ってきます。十二人の偵察のうち、二人だけ—カレブとヨシュア—が前向きな報告と、土地は良い地であり、乳と蜜があふれているという証拠を持って帰ります。他の十人は、「地には巨人」がいるということのみ強調し、イスラエルの子孫を震え上がらせました。カレブとヨシュアは、恐れることは何もないと人々に請け合おうとし、神とともにいればその巨人たちを間違いなく倒せると説きます。しかし巨人の話におびえかった人々は、耳を貸そうとはしません。その代わりに、十人のほうの報告を信じ、その地に入ろうとはしませんでした。

恐怖に屈し、カレブとヨシュアの報告を信じず、イスラエルの子孫達は、約束の地に入りませんでした。その代わりに、荒野を三十八年あまり、さまよいつねなければなりません。これは、自分の恐怖に耳を傾け、導かれるとき私たちそれぞれに、霊的に何が起こるかという劇的な例です。十一日ですむ旅が、三十八年もかかってしまうのです！しかし神は、十戒を通して来られ、私たちを恐怖から救いだし、囚われから解き放ち、—今日—乳と蜜のあふれる地へ渡るよう、励まされます。

そこで、エジプトから約束の地への旅は、私たちそれぞれの〈いのち〉の旅路です。それは身勝手さから無私への旅であり、自然的ないのちから霊的ないのちへの旅であり、世間の知識から役立ちの英知、地上から天界への旅です。最初の喩えに戻るなら、山頂、神の国の旅であり、そこでは霊的遺産をことごとく受け継ぐ事ができ、自分がそうなるようにするものすべてになることができることです。神の山に登りながら、雲とうす暗がり—恐怖、私たちをとらえてしまう感情や思考—の上を乗り越えてゆきます。すると高次の意識の明瞭な光のもとに出で、そこでは太陽は常に輝き、喜ばしい役立ちの機会が無限に広がっています。

セミナー

最後の検討として、十戒が神があたえたもうた法と納得させるのは、山頂での幾多の雷鳴ではなく、自分でそうであると実感せねばなりません。地図を学ぶように、ただ十戒を学ぶことはできません。十戒を生かし、その導くところに従ってゆかねばなりません。約束の地への地図は、たとえそれが最高のそして最も精密な地図で会ったとしても、それは約束の地ではありません。月を指さすことと、実際に月に着陸することは違っているように、地図を読むことと、旅をすることには違いがあります。

そこで宗教の登場です。自分が本当は何物であるか、神によってテストされることは、単に神学上の問題ではありません。また、文化的背景や自分が属する宗教組織の問題でもありません。それよりもむしろ、どんな信念を自分の人生に適用するかの問題です。神は、人にどんな宗教であったか、あるいは人種、国籍であったかを問い

ません。神が問うのは、人がそのころのすべてで何を愛しているか、そして人生でその愛をどのようにして示してきたか、ということです。インドの聖典にはこうあります。「ブラフマンは、生まれによってブラフマンではない。行いによってブラフマンとなる」(法句教26:11)。スウェーデンボリィはこう書いています。「死後、霊界において、『あなたの宗教は何ですか?』とは問われず、『あなたのいのちは何ですか?』と問われます。そのいのちが宗教であるからです」(神の摂理 101)

そこでこの書は、神学講話以上のものとしています。いのちについての書です。いのちの隅々まで十戒を納得させようとする書です。ここに含まれている情報は、「ライズ・アヴァブ・イット:十戒を通しての霊的成長」というセミナーを基本にしています。すでに指摘したように、ライズ・アヴァブ(乗り越える、超越する)とは、自らを見いだす環境や位置はつきりとみきわめるため、単に自然的な存在を乗り越え、意識のより高いレベルより神に近い状態—に入ることです。より高い有利な地点からの新しい視点を得ます。

十戒のそれぞれを通して進みながら、神の山に登り、低い本質からの刺激を越えて、知性を持ち上げれば、知っている真理と同じ選択をすることができます。真理を理解しながら、それに従って生きることを常に選ばうと努力することで、新しい性質が自分の内に誕生します。子供が幼児から少年へと育ち、ついには完全に成熟するように、この新しい性質は徐々に育ってゆきます。「再び生まれる」といわれることがあります。ほとんどの人にとってこれは漸進的な過程であることを銘記しておいてください。ヘレン・ケラーは幼少から聾・啞・盲でしたが、この過程を明確に知悉しており、それを雄弁に語っています。その霊的な自伝の中で、「人が時として考えているように、突然生まれ変わるものではありません。望み、熱望し、神の戒めをやり抜きながら、そのときはじめて変化がやってきます」。

セミナーは様々な環境の下で行われています。広く様々な宗教的背景をもった男女がある刑務所で、安全に最大限の配慮を払って行われたり、大学や専門校で、「キリスト教倫理」あるいは「道徳的生活」の講座として設けられたり、アメリカ合衆国とカナダの様々な教会の中や、アフリカの村々、世界中から電子メールでの参加、その結婚をより豊かなものにするため、炉辺にいる二人が、子育てに十戒を応用してみようとする母親が食卓を囲んで、サマーキャンプ、子供や友人たちとともに自宅の中で、……。セミナーの背景となる考えは、どんな環境であろうと、すなわち、世代・文化の差を超え、十戒を守ることによって霊的な成長を与える機会を造り出すことです。

セミナーの各クラスでは、十戒のどれかが展開され、様々なレベルの意義が説明され、課題が与えられます。参加者には、学習する戒め毎に、それを試した体験を記録するノートを取るようになっています。それぞれの戒の一つずつ集中するよう、期間を定め、その後、戒を実行した経験をクラスで分かち合うために集まります。そして、それぞれの経験を、ノートを読んだり、あるいはただ語ります。もちろん重要な神学議論にも時間は割きますが、個別の戒めを生活の細部までもちこんだ実際の経験や、これを行うことによって自分の心が開かれたことを分かち合います。さらに、その過程の中で得た考えや感情についても語ります。ひと言でいえば、学びそれを論じるのではなく、戒を守ることに焦点を当てます。エジプトの地での奴隷状態が何を意味するかで話したように、真理を学び、積み上げるだけではなく、むしろ、実際に自分の人生で真理を適用し、そうすることで、約束の地に入ります。

この本では、セミナー参加者の書き、許可を得た体験談を読むことができます。それは、プライバシーを守るために一部詳細を変更したり、省略しています。また、誤解を避け、明確さを増すために文法やスペルの間違いに手を加えています。それにもかかわらず、この体験談は、十戒を生活で実行するためにどんなに苦労しているかよく物語っています。

この本をより活用するためには

この本を最大限に活用するためには、戒を連続して学ぶことをお奨めします。各戒めの学習は、世界の大宗教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教・仏教・ヒンズー教)の聖典からとった引用のシリーズで始まります。その引用を見れば、世界のすべての宗教が、十戒のそれぞれをはっきりと、かつ中心に据えて教えているかがわかります。さらに、始めにある引用は、エマヌエル・スウェーデンボリィの著作からの引用にまとめ上げ、総合されま

す。彼は、18世紀のキリスト教神学者であり、その著作は、世界の宗教のすべてをより深く理解するならば、実は一つの宗教であることを示してくれます。フランスの小説家、オノレ・ド・バルザックが書いているように、「スウェーデンボリィは、疑いなくすべての宗教を要約し、あるいは博愛という一つの宗教にした」。

Oeuvres completes de h. de baizac, tome XV II (Paris: Michel levy freres, 1870),7.

各章を読むことで始め、各戒が守られる様々なレベルがあることに注意します。章の中にある手記には、特に注意してください。そうすることで、人がこの戒を自分の生活に適用するため、どんなに努力したかがわかります。次に、戒を、あなたの通常の意識レベルを「超克」するよう、用いてください。学んでいる個別の戒の観点から、注意深く、そして正直に自分を見つめてください。中国の哲学者、老子が語るように、「人を識る者は、識者という。自分を識る者は、賢者という」(老子 1:33)。最後に、そして最も重要なのは、日々自分の生活に戒が生きるよう実行することです。戒を実践した経験を、ノートに記録してください。

戒を実行するにあたり、人とともに行えば、大きな恩恵があります。戒について単に語り合う以上に、グループの雰囲気は支えとなり、励みとなります。会合のたびに、自分の結果を報告する機会を持つことになるので、いい刺激となります。参加者は、戒を実践した経験を報告することによって、自分自身と人に正直になってゆくことがわかります。また参加者は、自分が考えていたほど他人と異なっておらず、自分たちはすべて似たような問題に苦しみ、内輪だけでこの苦しみを正直に報告することが、自他ともに大きく役立つことがわかります。

グループ方式への参加には、時間や機会、そして性格上、不向きな人もいます。先に述べたように、信仰の道は、多様な道があり、学び方にも、多様な方法があります。登山にも、グループが向いている人がいるとすれば、単独行が向いている人もいます。約束の地に至るには、たくさんの道があります。そこで、章末に附した「さらなる考察と応用」は、個人とグループを対象として、両方の場に向けて考案されています。個人そしてグループのどちらを選ぶにせよ、各章末に附したヒントを、毎日の生活でより戒を活かす手段として活用することをお奨めします。

特に各章末にある、主の祈りへの考察を実践するようお奨めしたいと思います。聖典に深く思いめぐらすことは、伝統的な霊的訓練であり、ヒンズー教でいうところの「サマディ：三昧－自身の心を神と聖典に集中し、安んじること」に達する助けとなります。ジャイナ教の教えの内に、「正しい三昧とは、霊的な教えの主題を熟慮することにある・・・」(タットパールタ・スートラ9:36)。イスラム教の聖典には、「(只一筋に) あなたの主に傾倒するがいい。」(クルアーン94:8)。旧約聖書には、こう書かれています、「志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。」(イザヤ26:3)

狭き道

この序では、神の王国へは、多くの道があり、それらの道を要約したものが十戒であることを強調してきました。さらに指摘しておきたいのは、宗教の道、そして特に十戒の道は、「狭き道」と見られることがあります。人は往々にして、その狭さを、狭量あるいは厳格な生活様式とみてしまします。そして、それを「融通のきかない、そして狭い道」として語り、人生を貫く莊嚴で困難を伴う道と見ます。そんな考え方は、イエスの言葉、「狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」(マタイ 7:13,14) を誤解したものです。これを読んで、最初に感じるのは、確かに、宗教への道は、融通が利かず、狭く、困難なものだということでしょう。

別の一節です。

イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。すると、「主よ。救われる者は少ないのですか。」と言う人があった。イエスの答えは、「努力」という言葉で始まります。:「努力して狭い門からは入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろうとしても、はいれなくなる人が多いのですから。」(ルカ 13:22-24)。原語のギリシア語では、ここで「努力」とされている言葉は、「苦悶」に近い言葉です。これは、私たちが神の御心を最善を尽くして理解することによって、真にそして完全に生きてゆくよう努力すること

を求められていることが明らかに描かれています。

究極的に、大事な問いかけは、「どれだけの人救われるか？」や「道はたやすいのか、難しいのか？」ではありません。そうではなく、重要な問いとは、「神を信じますか？」そして「自分の信じるものに従って、勇敢に、心を尽くし、魂を尽くし、知力を尽くし、力を尽くして生きようと努力してきましたか？」です。善い人生は、自己の信念に、努力の積み重ねを結びつけることです。これが「狭き道」です。それには、神と十戒の実践へ力を尽くす必要があります。そうすることで、著しく「右」や「左」にそれ、それによって道を「広げる」ことを妨げます。旧約聖書にあるように、「ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。これを離れて右にも左にもそれてはならない。それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである」(ヨシユア 1:7)。

この書の中心となる前提は、ただ言葉に出したり、考えたりすることで、「神を愛する」ことはできない、ということです。心の中の思考や、唇にのぼる言葉は、人生における行動を基本とせねばなりません。イエスが弟子たちにおっしゃったように、「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」(マタイ 7:21) ; 「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」(ヨハネ 14:15)。裕福な青年が、イエスに、永遠の(いのち)を得るためには何をすればいいか尋ねた時、イエスはおっしゃいました。「もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」(マタイ 19:17)。つまるところ、戒を守るということは、神を愛することです。スウェーデンボリイは、「黙示録解説」981でこう記しています・

「主を愛するとは、十戒を守ることを愛することです；人は愛や情愛から、十戒を守り、行うにつれ、それと同じだけ人は主を愛することになります。そのわけは、十戒とは人の内にある主に他ならないからです。」

要約すると、十戒とは、すべてにおいて最良の教師が命じ、案出した天界のカリキュラムであると考えます。そして、それを守る者はすべて、この地上において、天界の生活の経験をすることができると信じます。なぜなら、十戒とは、私たちそれぞれの内に於ける神の存在であるからです。最初は「狭き道」に見えたとしても、偉大な自由への道の可能性を開いてくれます。このカリキュラムを試行し、そのなかで皆さんが変化を体験するよう、お導きしてゆきます。